

共に、それに相当する作用因の役割から、有限なものが直接神から贈られた存在において自立しているという点が強調されたからである。それ故にトマスは、分有の構造の中に自由な作用因の思想を導入することによって、また被造物によって分有された存在と神の存在を区別することによって、神と被造物との差異を明確にしたのである。トマスがこうして分有の関係の中で、神と被造物との相互の自由な出会いの場を切り開いているとすれば、彼は被造物を、啓示における神の自由な自己伝達のための前提および可能な受け手として考えていたのであろう。（本間英世訳）

質問 I

松 永 雄 二

お二人のきわめてすぐれた発表によって、「中世哲学とプラトニズム」というテーマは、もはや討論がその中で行なわれる外的な枠組ではなく、むしろ真正の哲学的思索がそこから出発する内的な地平を照らすものとなった。以下のそのことへの讃辞をこめて、事柄そのものの解明のために或るひとつの問題点を取上げさせていただきたい。それはプラトンの哲学に始まる「分有」という問題を如何に解するかにある。

K・リーゼンフーバー氏は、この問題を、何よりもまず無制約的な善そのものとわれわれの自己の存在の関わりという面から問われたように思われる。すなわち、善そのものの超越は自己の行為と存在の開けを可能にするものであり、そこに現われる自己であることの問題性の地平こそが、まさに「分有」という構造の基幹をなす問題場面にほかならないことを指摘された。これはイデア論の存立にかかわる重要な示唆であり、すなわちイデア論とは、ほかでもなくわれわれが、自己および世界に対する自然的把握のうちには、究極的に——そしてむしろ原初的に——決して止まり得ないことの意味としてあることを、示唆されたように思われる。

これに対して、泉氏は、不変なるものと可変的なものという二元的構図がややもすれば陥り易い罠、すなわち可変的なものは、存在と無の中間者としての存在領域

を占めるという把握が、アンセルムスによって如何にするどく斥けられているかを的確に指摘された。そしてたしかに「分有」ということが、何かそのような二つの存在領域を前提とした上で、その両者を関係付ける公式として働くというのであれば、そのようなプラトニズムは、まさに「創造」*creatio* という事柄の純乎とした理解を妨げるものとして、正しく拒否されねばならないであろう。しかし「分有」というプラトンの初・中・後期をつらぬく問題は、果してそのような段階説を基幹とするものであったろうか。

メテクシス・パルウーシアという問題は、先にもふれたように、もののあること(存在・価値)に対する自然的把握の崩壊に始まる。そしてそのとき「それ自身においては正でも不正でもないものが、如何にして正しいと語られまたそうあるのか」という問が生ずる。(『ゴルギアス』467C以下参照)。そしてまさにこの問は、「それ自身ではAでも non-A でもないものをAとする」というドクサの絶えざる吟味によってのみ遂行される以上は、かのイデア論の「すべて正しいものは正そのものによって正しい」という表明は、まさしく知の成立の根拠を、すなわちあること自体の意味を語るものにはかならなかったのである。

——それにしてもわれわれは、たしかにそのような *forma* としてある存在の意味と、*creatio* そのものとの最後のなかかわりを、究極には問わねばならないであろう。(それはいう迄もなく範型因とか形相因の位置付けという単純な問題ではない。) その課題の重さをこのシュンボシオンを通じて、質問者はあらためてみずから感ずるのである。

質問 II

加藤 信朗

御両人のディスカッションの問題点の中心を松永氏がたいへん適確に指摘して下さいだったので、私もその線に沿って、アンセルムスのテキストに即した一つの問題点を提出したい。